

県立図書館だより

平成22年10月

青森県立図書館報 第8号



じゃあ、読もう。

2010年は「国民読書年」です。

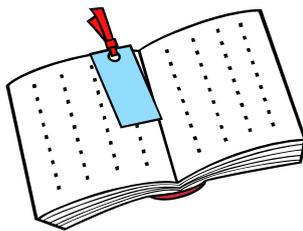
青森県子どもの読書推進大会

青森県立図書館では、国民読書年記念事業として、11月21日(日)に隣の青森県総合社会教育センターを会場として「**青森県子どもの読書推進大会**」を開催します。

県内の小・中学校、高等学校の児童・生徒から応募された**読書や図書館に関する「標語コンクール」**の表彰式等や、『魔女の宅急便』(1985年福音館書店)をはじめ、様々な童話の作者である**作家角野栄子氏**による記念講演「**魔法はひとつ**」、大学生によるミニおはなし会、県立図書館の本の貸出しなどを行うこととしております。

次ページにチラシがありますので、どうぞ御覧ください。

なお、「**青森県子どもの読書推進大会**」に参加するには申込みが必要です。詳しくは、青森県立図書館へお問い合わせください。



お問い合わせ先

青森県立図書館 企画支援課
電話 017-739-1456 FAX 017-739-8353
ホームページ

<http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/dokusyonen/2010kokumin-dokusyonen.html>

目 次

国民読書年記念事業	1
青森県子どもの読書推進大会チラシ	2
竹内俊吉生誕110年展	3
こんなレファレンスがありました	4～5
子どもの本の紹介	6
郷土資料の紹介	7
近代文学館資料の紹介	8
カウンターから一言	9～10

青森県子どもの読書推進大会

記念講演

作家 角野 栄子 氏 「魔法はひとつ」



(ポプラ社刊)



(福音館書店刊)



(ポプラ社刊)

PROFILE 角野 栄子 氏

東京都に生まれる。早稲田大学教育学部卒業。1960年にブラジルに移住し、2年間滞在。帰国後、サンパウロの少年を描いた『ルイジニョ少年、ブラジルをたずねて』(1970年 ノンフィクション)が処女作。その後、童話や絵本の創作を始める。『わたしのママはしずかさん』(偕成社)『ズボン船長さんの話』(福音館書店)で路傍の石文学賞。『魔女の宅急便』(1985年 福音館書店)で野間児童文学賞、小学館文学賞、IBBY オナーリスト文学賞など受賞。『魔女の宅急便』はその後シリーズ化し、2009年10月の『魔女の宅急便 その6 それぞれの旅立ち』で完結した。その他、著書多数。

開催日程

- 12:30～ 受付
- 13:00～ 開会行事
- 13:10～ 標語コンクール表彰式 ほか
- 14:00～ 記念講演

期日 平成22年 **11月21日**

- 対象** 小学生とその保護者、中学生、高校生、一般県民
- 参加申込方法** 図書館等に備え付けてある申込書に必要事項を記入して
①県立図書館へ直接持参 ②郵送 ③FAX するか、
④必要事項をメールまたは電話でお知らせください。

会場 青森県総合社会教育センター
(県立図書館となり)

- 申込締切** ★ 託児ありの方：11月5日(金)
★ 託児なしの方：11月12日(金)

託児を実施します。



参加無料
定員：300名

申込み及び問い合わせ先

〒030-0184 青森市荒川字藤戸 119-7 青森県立図書館 企画支援課
電話：017-739-1456 FAX：017-739-8353 メール：kyo@plib.net.pref.aomori.jp
ホームページ：http://www.plib.net.pref.aomori.jp/

「竹内俊吉生誕110年展」開催

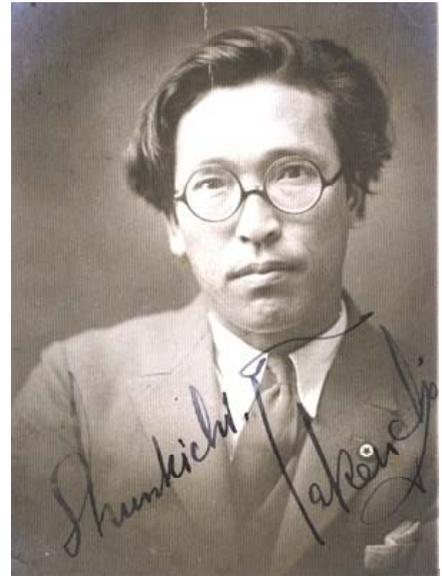
青森県近代文学館では10月9日(土)から11月21日(日)まで、企画展示室(県立図書館2階)において「竹内俊吉生誕110年展」を開催します。

竹内俊吉(1900~1986)は、西津軽郡出精村、現在のつがる市で生まれ育ちました。1925(大正14)年に東奥日報社に入社し、記者生活の傍ら雑誌「黎明」に小説を発表。また、県内の文人・結社に呼びかけ総合文芸誌「座標」を創刊する等、本県の文化運動の牽引者として活躍しました。

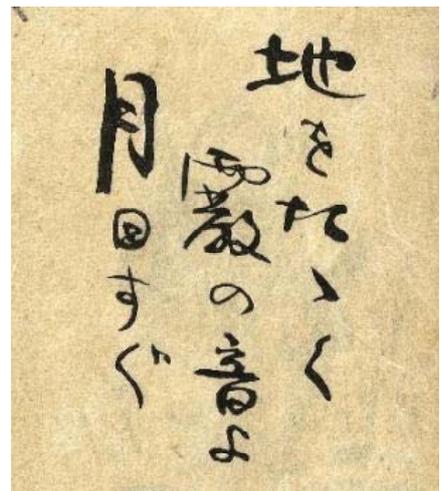
戦後は衆議院議員を経て青森県知事となり、県政の発展に尽力。公務の合間には書画を嗜み、俳誌「春燈」への投句を継続する等、文化に親しむ姿勢を崩すことはありませんでした。

この企画展は、生誕110年という節目の年にあたって、その生涯と文学活動の業績を振り返るものです。「座標」をはじめ俊吉の作品が掲載された文芸誌のほか、遺品や直筆資料を多数展示します。

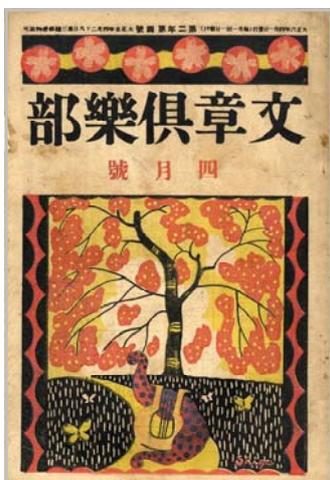
また、会期中の11月7日(日)には当館職員による日曜講座「文人・竹内俊吉」を開催します。



若き日の竹内俊吉



俊吉の揮毫による句(俳句集『雪』より)



【資料紹介】

「文章倶楽部」第2巻第4号(大正6年4月発行)

竹内俊吉は17歳の頃、様々な文芸誌に投稿を行っていました。この雑誌には、俊吉の投稿作品が3点掲載されています。「名作絵物語 吾輩は猫である」という懸賞に応募し当選した作品、「新技巧の研究 雪の描写」という課題に対する50字ほどの文章、そして「我が思ふ人皆去りぬ吾一人津軽の春の若草をつむ」という短歌の三つです。俊吉の文学活動の原点を垣間見ることのできる資料、ぜひ御観覧ください。

※展示の詳細は「開催中の企画展」(<http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/museum/takeuti110.html>)を御覧ください。

こんな レファレンスがありました



(第8回)

参考・郷土室では、「探している本が、どこの図書館にあるのか知りたい。」「こんなテーマの本はありますか。」「こういう事柄や人物を調べたいが、どんな本がありますか。」などというレファレンス（質問）に、図書館資料等を使って、お答えしています。

そのレファレンスの中から、郷土や最近の話題を取り上げて紹介します。

明治43年は、76年周期で太陽の軌道を回っているハレー彗星が、地球に再接近する年でした。東京天文台（現在の国立天文台）をはじめとした専門機関は、彗星が太陽面を通過する様子を観測しようとしたのですが、失敗してしまいます。

ところが、八戸で時計店を営んでいた前原寅吉がただ一人、「太陽面観望用眼鏡」の発明により彗星の観測に成功するという偉業を成し遂げます。今から100年前の1910（明治43）年5月19日のことです。

観測技術が発達した現在、毎年のように宇宙・天体に関する大きなニュースが伝えられ、私たちに驚かせ、果てしない宇宙への思いを強くさせます。

今年は、小惑星探査機「はやぶさ」が7年の時を経て「イトカワ」の観測から無事地球に帰還したニュースが話題になりました。昨年7月22日には、雨のため十分な観測はできなかったようですが、日本国内では47年ぶりという皆既日食があったことは記憶に新しいところです。

今回は、レファレンスで何度かお問合せをいただいた、天体の話題を紹介します。



【質問】 天の岩（屋）戸の話は、日食ではないかと言われていると聞きました。コンピュータやプラネタリウムで過去の天体を映し出したり、日食・月食の予測をしているのですから、いつのことなのか分かっているのではないのでしょうか。書かれた資料はありませんか。

日本書紀に書かれているこの神話は、天照大神（あまてらすおおみかみ）が天の岩屋戸（いわやと）に隠れ、辺りが闇に包まれたというお話です。描写がとても具体的で、「皆既日食」だという説があります。「邪馬台国論争」とあいまって、この神話の舞台になったのが「邪馬台国」であり、日食の場所と範囲が分かれば邪馬台国の場所を解明できるのではないかという話題は古くからありました。

昨年の皆既日食でも青森県では部分食、トカラ列島では皆既日食だったように、太陽が完全に隠れてしまう「皆既帯」の場所は限られています。

邪馬台国は3世紀ごろにあったとされ、クニの始まりは1世紀ごろという説があります。その間の1～3世紀に日本付近であった皆既日食の通り道を計算すれば良いわけですから、答えは出ているのではと思ってしまう。

『日本・朝鮮・中国 日食月食宝典』（渡邊敏夫著 雄山閣出版 昭和54年）などの資料によると、1～3世紀の間に、西暦53年、158年、247年、248年の計4回の皆既日食があったことは計算上分かっているそうです。

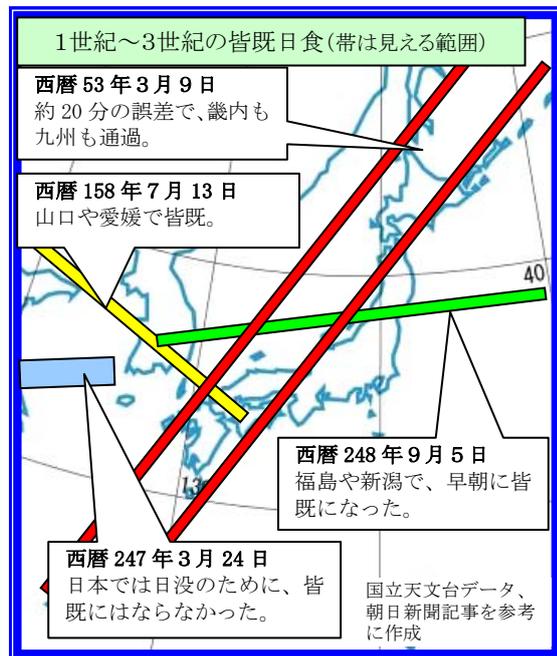
あとは、それらの皆既日食が現れたのが「畿内」か「九州」かで、邪馬台国論争に決着が付くこととなります。

ところが実際には結論が出ていません。ここで問題になるのが「地球の自転」です。地球が1回転する時間は、月の引力などの影響を受けて少しずつ長くなっています。そのため、遥か2,000年近く前の日食を計算するためには、実際に観測された記録によって時刻の補正が必要となります。

残念なことに、日本で最も古い日食の記録は『日本書紀』推古天皇36年3月2日(西暦628年4月10日)のもので、更に数百年前の日食を正確に導き出す記録が残っていないためなのです。

本年3月28日付の朝日新聞に、国立天文台の2人の学者がこの問題に取り組んでいるという記事が掲載されました。

2人は、時刻補正のための記録が日本のものでは限界があるため、朝鮮の歴史書「三国遺事(さんごくいじ)」に出てくる「新羅(しらぎ)地方で太陽の光が消えた」との記述に着目し、これが新羅で見た158年の日食と特定しました。そこから導いた補正の幅から248年の皆既帯は東北地方、247年の日食は日本では日没後で、畿内、九州いずれも皆既日食が見られなかったことを解明しました。



158年の日食は、朝鮮半島から山口、愛媛で日没直前の午後7時すぎに20秒ほど皆既になりましたが、これも畿内、九州は外れていました。

そして、53年の皆既日食が西日本を横切り、午前11時すぎには30秒ほど皆既になっていたことを導き出しました。

ところが、時代が古いため補正の誤差を絞りきれず、誤差の範囲に畿内、九州両方を含んだまま結論が出なかったということです。

2人は、この時期の天文現象を記録した文献が世界のどこかに残っていないか探して行きたいと話しているそうです。

『日本・朝鮮・中国 日食月食宝典』で著者は、9、10世紀ころの『三代実録』、『日本紀略』などでは、今日から推算すると日本では見えないはずの日食や日時の記事があり、予報記事をそのまま歴史書に“見えたように”記載したものもある。「神話はどこまでも神話で〜」年代を明確にすることはできないと述べています。

【参考資料：上記記述済の他】

- 『国史大辞典 第11巻』(吉川弘文館) p 51 「日食」の項
- 『日本大百科全書 第17巻』(小学館) p 773 「日食」の項
- 『青森20世紀の群像』(東奥日報社 2000) p 140・141
- 『鈴木喜代春児童文学選集 第6巻』(らくだ出版 2009) 他

- レファレンスは、電話・手紙・FAXのほか、電子メールでも受け付けています。
レファレンス申込み及び問い合わせ先
青森県立図書館 参考・郷土室
電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757
電子メール sanko@plib.net.pref.aomori.jp

子どもの本の紹介(第8回)

青森県立図書館では、毎月第4土曜日(11月、3月を除く。)に科学おはなし会を開催しています。

今年4月の科学おはなし会を担当してくださった板柳町少年少女発明クラブの野呂茂樹先生が、9月26日に日本科学未来館で開催された「科学の鉄人」(注)の出場者4人のうちの1人に選ばれ、「マジックは科学～メビウスの輪の謎解きに挑戦しよう～」という内容で科学実験ショーを行いました。

また、11月7日(日)に板柳町多目的ホールあぷるで開催する「平成22年度こどもブックランド『ほんの森』」では、「バランスであそぼう」をテーマに科学の実験やお話をさせていただきます。

4月の科学おはなし会の様子



科学おはなし会では、楽しい科学のお話のあとに、当館職員がテーマに関連した図書の紹介をしており、子どもたちが自分自身で図鑑や観察事典等を手にとることで、科学への興味を深めています。

そこで今回は、おもしろい科学読物に出会えるガイドブックを紹介します。

『科学の本っておもしろい 2003-2009』

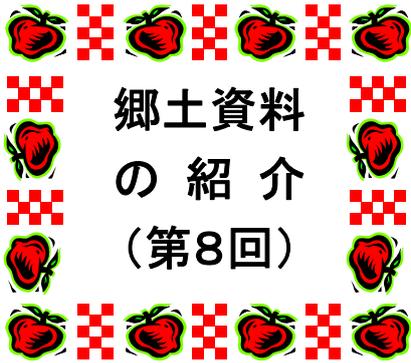
科学読物研究会編 連合出版 2010 (児研 407 かがくヨミ(2003))

この本には、「科学入門」から「人・社会・暮らし」といった幅広い分野の子どものための科学読物がたくさん紹介されています。保育士や母親といったいろいろな立場で子どもと接している科学読物研究会の会員の方が選んでいるため、小さな子どもから大人まで楽しめる本のリストとなっています。

例えば、「実験してみよう ためしてみよう」では、「科学でふしぎなことを体験し、科学する心をたかめよう」をテーマにした野呂茂樹先生著作の『先生はマジシャン 第3集』連合出版 2006 (一般室 375.42 ノロシ(3))も紹介されています。

科学の本は難しいと思われがちですが、子どもたちの身の回りには不思議があふれています。子どもたちがいろいろなジャンルの本と出会うことで、読みたいと思う本を子ども自身の手で選んでいただけたらと思います。

(注)「科学の鉄人」とは、出場者がトーナメント方式で科学実験ショーをし、参加した子どもや大人たちがショーを評価し、投票によって勝ち負けを決めるという大会です。



郷土資料 の紹介 (第8回)

去る平成 22 年 8 月 29 日、八戸市出身の作家・三浦哲郎さんがお亡くなりになりました。

昭和 6 年、八戸市に生まれた三浦哲郎さんは、早稲田大学在学中から小説を書き始め、昭和 35 年、「忍ぶ川」によって、青森県出身者として初の芥川賞受賞者となりました。

その後も、端正な筆致で読者に清冽な印象を与える作品を次々と発表し、野間文芸賞・日本文学大賞・大佛次郎賞・川端康成文学賞・伊藤整文学賞など、数々の文学賞を受賞されました。

三浦哲郎さんのご冥福をお祈り申し上げるとともに、追悼の意を込めて、ここでは特に、県内で出版された資料をご紹介します。

『ふれあい散歩道 三浦哲郎とともに』（三浦哲郎著 デーリー東北新聞社 1988）

昭和 62 年 4 月から翌年 3 月まで『デーリー東北』紙上に連載された対談をまとめたもの。

南部杜氏や鍛冶職人・猟師など計 50 人の南部人と、まるで「道でばったり会って、そのまま一緒に散歩しながら話すよう」に交わされた会話からは、市井の人々に対する、著者の温かい眼差しが感じられます。

『自作への旅』（三浦哲郎著 デーリー東北新聞社 1991）

平成元年 9 月から翌年 10 月にかけて『デーリー東北』紙上に掲載された文章の中から、22 篇を選んでまとめたもの。

「十五歳の周囲」から「白夜を旅する人々」まで、ふるさと南部を舞台にした自分の作品に関する想いやエピソードなどがつづられています。

『三浦哲郎文学散策のしおり』（三浦哲郎文学顕彰協議会事務局 2009）

八戸市三日町の「三浦哲郎誕生の地」をはじめ、「白夜を旅する人々」「しづ女の生涯」など、作品のモデルとなった場所や文学碑など計 13 か所を、解説付きのカラー写真と散策マップで紹介しています。



青森県立図書館では、青森県に関する資料や、青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物などを郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様に広くご利用いただいております。

今後ともこのコーナーでは、当館所蔵の郷土資料の中から、普段はあまり人目に触れる機会の少ない貴重な資料などをご紹介します。

近代文学館資料の紹介(第8回)

野脇中学校文芸誌「白鳥」

寺山修司が野脇中学校の3年生だった頃、文芸部の仲間と刊行した文芸誌「白鳥」が、このたび青森県近代文学館に寄贈されました。中学時代の寺山修司がどのような創作活動をしていたのかを伝える、貴重な資料を紹介します。



文芸誌「白鳥」は、1950(昭和25)年8月20日、野脇中学校文芸部の3年生によって刊行されました。

昭和24年、中学2年の時、寺山修司は、三沢市から青森市の野脇中学校に転校してきました。すでに父親は戦死し、母親は福岡県のベースキャンプで働くことになったため、青森の大叔父夫婦に引き取られたのです。

文芸誌「白鳥」が刊行されたのは、寺山が野脇中学校に来て約1年が経った時期にあたります。

ガリ版刷りで48ページの「白鳥」には、野脇中学校文芸部22名、先生2名の詩・小説・短歌・俳句など235編が掲載されています。メンバーの中には、のちに青森高校でも文学仲間となる京武久美、東義方らの名前も見えます。

この創刊号に寺山は、全部で90編(詩12編、小説2編、童話1編、短歌45首、俳句30句)と、群を抜く数の作品を発表しました。また、巻頭の「創刊の辞」では仲間を代表して「僕達が最も待望していた雑誌を僕達の手でとうとう仕上げました。」と喜びを述べています。「白鳥」刊行にあたり、寺山が編集の中心人物であったことがわかります。

寺山修司が本格的に文学の道を歩む出発点は、青森高校時代に熱中した俳句であったことは良く知られていますが、この資料からは、中学校時代の寺山修司が、すでに様々な表現形式を用いて多くの作品を書いていたこと、仲間の作品を集め、編集活動の中心となっていたことが良くわかります。寺山修司の文学活動の原点を知ることのできる貴重な資料です。

この資料は、野脇中学校時代の同期生である内山啓次郎氏・京子氏のご夫妻が大切に保管しておられ、60年の歳月を経て、当館に寄贈される運びとなりました。

10月1日から1ヶ月間、常設展示室内「今月の作家」コーナーで展示しています。



カウンターから一言 (第8回)



今回は、「新聞」と「録音図書」などについてご案内します。

一般閲覧室では、当日の新聞、今月分や前月分など最近の新聞について、自由に閲覧することができます。

現在、閲覧室にある新聞は約30紙で、県立図書館ホームページで確認できます。(http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/images/list/H P_list-shinbun.pdf)



一般閲覧室の新聞架に置いているものより以前の新聞については書庫に保管しています。閲覧する場合は書庫からお持ちしますので、「閲覧請求票」にご覧になりたい新聞名、年月等を記入してカウンターにお出してください。

書庫では、原紙は2年間保管し、一部の新聞を除いて、マイクロフィルムや縮刷版などの形態で古い新聞を永年保存しています。

所蔵している新聞の種類や時期については、職員にお尋ねください。

また、一般閲覧室には、新聞を閲覧する方や複写する方のための「専用席」と「優先席」を設けています。そちらの席では、新聞を広げて読むことや、音を気にせず新聞をめくることができますので御利用ください。



一般閲覧室に本が読みづらい方のために、**録音図書**（本を朗読しデジタル録音した**CD-ROM**）をご用意しました。一般的には、**DAISY（ダイジー）図書**と呼ばれています。

- 一般閲覧室パソコン専用席で、ダイジー再生機とヘッドホンを使用して、ご利用になれます。カウンターにお申し込みください。
- 館外貸出しもできます。



ダイジー再生機(左)とダイジー図書(右)



音声パソコン

また、以下の機器もご用意しましたので、ぜひご利用ください。

よみともライト(活字自動読み上げ機)

本などをスキャナーの上に置いて文字を読み取り、音声で読み上げる機器です。

ダイジー図書を再生するものではなく、紙などに印刷された文字を読み上げるものです。(表や図、写真、絵などは、読み上げることはできません。)

- 一般閲覧室のパソコン専用席ブース5に設置しています。
- ヘッドホンを使用してのご利用になります。カウンターにお申し込みください。



拡大読書機

視力が弱い方が、文字や写真などを自分に合った倍率に拡大して読むことができる機器です。

- 一般閲覧室奥の席に設置しています。
- カウンターへの申し込みは必要なく、自由にご利用になれます。



編集後記

「県立図書館だより」第8号は、「青森県子ども読書推進大会」などについてご紹介しましたが、県立図書館では、子どもたちが、本に親しみ、読書の楽しさを感じることが出来る「おはなし会」や科学おはなし会も開催しています。親子でどうぞ。(広報委員会)